

「小さな角」とは何者ですか

緋色の野獣のひとつの際だった特徴がその存在時期です。

「かつてはいたが、今はおらず、後に現われる」啓示 17:7、8 (八人目の王)

「以前いて、今はいない獣は、第八の者で、またそれは先の七人の中の一人であったのだが、やがて滅びる。」(啓示 17:11 新共同訳)

8人目の王が、「かつていたが今はいない」というのはいつのことでしょうか。

最後の最後に現れる者、それは「小さな角」ですから、ダニエル書から改めてこれに付いて調べて見ることにしました。

(ダニエル 8:8 - 11) 「その雄のやぎは・・強大になるや、その大いなる角は折れ、その代わりに際立った四つの[角]が生えて来て、天の四方の風に向かった。そして、そのうちの一つから、別の角、小さい[角]が出て来た。それは非常に大きくなって行って・・飾りとなる所に向かった。そして、その軍の君に対してまでそれは大いに高ぶり、その方から常供のものが取り去られた。また、その方の聖なる所の定まった場所は打ち捨てられた。」

南の王も北の王も、この「雄やぎ」から発生しています。

4つに分裂した国のうち「南の王」はエジプト、「北の王」はシリア。

「そのうちの一つから、別の角、小さい角が出て来た」とありますが、これの解き明かしをしたガブリエルの解説ではこうなっています。

(ダニエル 8:17-25) …「人の子よ、理解せよ。この幻は終わりの時のためのものである」…わたしは、糾弾の最終部分に起きる事柄についてあなたに知らせよう。それは終わりの定められた時のためだからである。

「また、毛深い雄やぎはギリシャの王を表わしている。また、それが折れて、その代わりについて四本の[角]が立ち上がったが、彼の国から四つの王国が立つことになる。

「また、彼らの王国の末期、すなわち違犯を行なう者たちが極みに進む時、顔つきが猛悪で、あいまいな言い回しをよく理解するひとりの王が立ち上がる。そして、その者の力は必ず強大になるが、それは自らの力によるのではない。また彼は驚くような仕方で滅びをもたらし、必ず成功を収めて、効果的に事を行なう。また彼は力ある者たちをまさに滅びに至らせ、聖なる者たちで成る民をも滅ぼす。そして、その洞察力によって欺き事を必ずその手中で成功させる。そして、君の君たる者に向かって立ち上がるが、人手によらずして碎かれることになる。

この小さい角の預言はシリア(北の王)のセレウコス王朝出身のアンティオコス・エピファネス(BC 175-163在位)によって成就しています。

エピファネスが神殿を汚し、常供のものを取り去ったのは歴史上よく知られています。

エピファネスについては外典の「第一マカベア書」に詳しく書かれています。

彼は、軍隊を突如エルサレムに遣わし、城壁を破壊し、家々を焼き払い、多くのユダヤ人を殺害し奴隷、捕虜にし、律法や朝夕ごとにささげられる常供のささげ物まで禁じ、エルサレム神殿内にゼウス神を祭り、その祭儀にユダヤ人を強制参加させ、誰であれ彼の偶像崇拝に従わない者は容赦なく処刑にしました。

またエピファネスは当時イスラエルとの間に結ばれていた和平条約を破り捨て、自らを神格化し、羽のついた汚れたゼウス神の偶像をエルサレム神殿内に祭り、そこで豚の血をいけにえにささげ、すべてのユダヤ人に偶像崇拝を強要したと伝えられています。

さてダニエルは「小さな角」に関する別の預言を7章の中でも記録しています。

(ダニエル 7:7 - 8) 「四番目の獣、恐ろしく、際立って強いものがいた。そして、それはそれ以前にいた[他の]すべての獣と異なっており、しかも十本の角があった。…見よ、別の角、小さなものがそれらの間に生えてきた。初めにあった角のうち、その前から引き抜かれたものが三本あった。

(ダニエル 7:24 - 25) 十本の角について言えば、その王国から起こり立つ十人の王がいる。そして、それらの後にさらに別の者が起こるが、その者は初めの者たちとは異なっており、また三人の王を辱める。」

四番目の獣の登場は、古代ローマ帝国によって成就しているが、後半の10本の角の記述以降は「終わりの日」に成就することになっています。

ダニエル8章の「小さな角」はギリシャから分かれた4つのうちの一つから出て来るという記述になっており、7章ではローマの最終段階で登場します。

この一見矛盾するかのような記述をつないで、詳細を明らかにしているのが啓示17章です。

つまりローマ（後の時代の復興したローマ）は10本の角のある獣として登場します。

さて、冒頭に挙げた、啓示17章の「第8番目の王」ですが、これは、まさしく最後の最後の王です。つまり、10本の角の3本を抜いて最後に割って入った「小さな角」に他なりません。この「小さな角」は第四獣（ローマ）から生えてくるのに、「かつていたが、今はいない」つまり、ローマの前に存在し、一世紀にはいない王です。このことから、後から出る「小さな角」は実は古代ローマ帝国の構成国のものではないことが分かります。これについては次のように表現されています。

(ダニエル 7:24) 「それらの後にさらに別の者が起こるが、その者は初めの者たちとは異なっており、また三人の王を辱める」

「小さい角」が他の角と異なっているのは、他の3人の王を辱めることをさしているのではありません。異なっているのは出身地、別の獣の構成国からのものだけということでしょう。

それはつまり「かつていた」ギリシャに属していたはずの者である、従って終末期の復活ローマである7番目の頭に元ギリシャの王（終末期のエピファネス）が生えてくると考えられます。

「かつていたが今はいない野獣、それ自身は八人目[の王]でもある」と表現されているものは第4の「恐ろしい獣」にある角にそれが合体した形をとるということです。

具体的には、エピファネスはヨハネがこれを記した西暦1世紀には、すでに170年くらい前の人で「かつていたが、今はいない」と言えます。

「先の七人の中の一人であった」現代版（終末期の）エピファネスは、10本の角からなる復活ローマを言わば乗っ取って、イニシアチブを取ると考えられます。ゆえに7番目の野獣でありながら、8人目の王でもあると言われているのでしょう。

ここで、7番目の王についての記述の違いについても明らかにしておきましょう。

7人の「王」のうち、5人はすでに倒れ、一人は今おり、他の一人はまだ到来していないということですが、「野獣」の場合、全部で4頭しかおらず第5の獣はいません。

従って、ヨハネの時代に、7人目の王はまだ到来していないが4番目の獣として今いることとなります。

そして、ローマはヨハネの時代の前に「かっていた」ことはありません。

従って、大いなるバビロンを運んで登場する獣は、厳密にはローマではなく、また常に歴史上存在した一連の強国すべてでもなく、8人目の王以外にはいません。

つまり現代版エピファネスです。

